

4 那須地区（ちいじがき集落）における歴史的風致

（1）はじめに

甘楽町の最南部に位置する那須地区（ちいじがき集落（「ちいじがき」：小さな石で作った石垣の意味））は、町の中央を流れる一級河川雄川おがわの水源の地であり、信仰の対象である稲倉山いなふくみやまを背負う山間地域である。

この集落は、南向きに位置し日照には恵まれているが、傾斜地であるため、決して生活に適しているとはいえなかった。古くから、傾斜の耕作地や沢から出る小さな石を積み上げて、住宅の敷地確保や耕作地を切り開いていった。

明治初頭からの養蚕の普及や同中期ごろから作付けされるようになったこんにゃく芋栽培により、より多くの耕作地が必要とされたが、当地の土壌は砂質分が多く水はけが良い一方で、急傾斜がゆえ、土壌流出に対する管理など大変な苦労があった。

こうしたなかでも、この地域の人々はわずかでも耕作地を増やそうと、開墾時に排出される石を用いて石垣を築きながら切り開き、広げた耕作地を「耕して天にいたる」

がごとく、石垣を幾段にも築いて段々畑を造成してきた。

この畑を支える石垣が「ちいじがき」であり、本町の原風景として継承されてきた。



■ 「ちいじがき」の集落



■ 「ちいじがき」で築かれた段々畑

（2）那須地区（ちいじがき集落）に引き継がれる建造物

① 山間地を耕作する知恵が生みだした石垣「ちいじがき」

「群馬歴史散歩」（「群馬歴史散歩の会（1973年10月発足）」）が刊行した特集（甘楽町・平成14年（2002））によると、「ちいじがき」の築造は、鎌倉時代後半に始まったとされる。

築造時期が古い段々畑の最下部には、寺院や神社の境内の石垣にみられる石を段上に積み上げていく「**重箱積み**」と呼ばれる古い形式の石垣が積まれていた。この石材は、雄川のいたるところに露出していた「三波川結晶片岩」と呼ばれる板状の石であり、鎌倉時代中期ごろより建立され始めた供養塔などの「板碑」と同じ石材である。



■三波川結晶片岩の板碑
「建長の板碑」／町重文

しかし、築造が始まった初期には豊富にあった板状の石も次第に少なくなってくると、転石を混ぜて築造するようになり、石垣の上部は石同士がかみ合うように、斜め方向から差し入れるかたちの「**矢羽積み**」へと移行し、現在の「**ちいじがき**」となった。



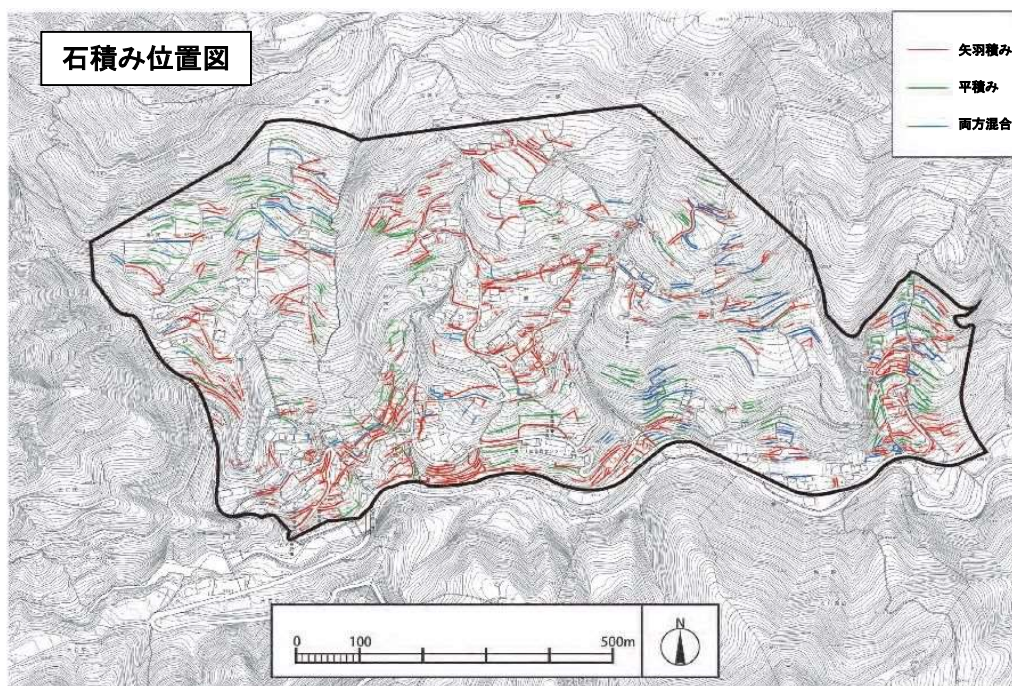
■「重箱積み」の石垣
板状の石を重箱状に積み上げたもの



■「矢羽積み」の石垣



■地区内に築かれた「ちいじがき」



傾斜地である耕作地は、大雨が降れば畑の土も蒔いた種も流されてしまうような地形であり、肥料の運搬なども苦しい仕事となっていた。

この集落の人々は、歩いただけで土が下方へ下がり落ちてしまうような急傾斜の耕作地を活かしていくために、「サカサッポリ(逆さ掘り)」と呼ばれる特有の耕作方法を取り入れていた。

これは、つねに下方から上方に向かって掘りながら、土を掻き上げるようにして畑を耕すものである。また、水害による石垣の修復作業は、集落の人々の生活に重くのしかかり、段々畑の積み上げと修復は、通常農閑期の仕事となった。

宅地周りに築かれているちいじがきでは、より強固な石積みとなるように、最下部に大きな石を積み、天端に向かうにしたがって小さい石材を積んでいく。石積みの断面構造としては、石積の鉛直方向の真ん中あたりを山側にへこむように巧みに積む積み方で、石積みをはらみにくくする方法なども養われていった。

こうした石垣との苦闘は、この地の石積みにおける専門的な技術を向上させ、築造され地区全域に広がるちいじがきは、那須地区の人々にとって生活の一部といえる建造物となっている。



■急傾斜を耕す「サカサッポリ」



■急傾斜地の畑

② 山岳信仰 いなふくみやま 稲倉山 と「いなふくみじんじゃ 稲倉神社」

ちいじがき集落の南西端には標高 1,370m の稲倉山がそびえ、その麓には地区の全世帯が氏子となっている鎮守「稲倉神社」がある。この集落では、稲倉神社にまつわる農耕神事や祭礼が古くから継承されている。



■明治期に寄進された旧稲倉神社社殿

稲含大明神御縁起（永正2年（1505））によると、当社は、第27代安閑天皇の御代（西暦530年ごろ）の創建で、旧社殿は明治期に寄進された。

現在は、旧社殿の老朽化や参拝時の安全面などから、「神の池園地」の下方に御神体、神額しんがく（※1）（正一位、文化15年（1818）4月1日）などと共に移転されている。



■現在の稲含神社社殿

稲含山は、ぐんま百名山にも選ばれ、甘楽野を一望に望見する勇壮さで人々を庇護してくれるものとして崇敬されており、祭神は豊受姫之命である。

豊受姫之命は印度国から日本へ渡り、この稲含の地で養蚕や稲作を広めたとされ、印度から稲の種子を隠して運ぶのに大変苦勞し、種子を口に含んで持って来たことが“稲含”の由来となっている。養蚕と五穀の守神として祀られ、今も多くの人が稲含山と稲含神社を参詣している。



■現在の稲含神社社殿（2006年築）



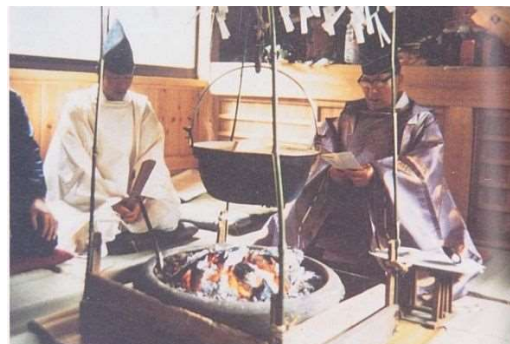
■神額（稲含大明神）

※1 神額しんがく:神社の本殿正面、鳥居などに掲げてある木製の額。扁額へんがくともいう。

(3) 那須地区 (ちいじがき集落) における祭司

① 御筒粥の神事

稲舎神社では、新年 1 月 7 日前後の日曜日に「御筒粥の神事」(町重要無形民俗文化財／昭和 42 年 (1967) 5 月 5 日指定) が行われる。起源については、明らかな記録はないが、江戸期初期にはすでに行われていたと伝えられている。33 本の竹の筒をお粥の中に入れ、粥が煮上がるまで神官が祝詞を上げ、筒に粥が満ちるか満ちないかによって一年間の農作物の吉凶、照り、降り等を占う農耕神事である。その結果は、印刷されて全氏子の家に配られる。



■御筒粥神事 (昭和 44 年ごろ)

稲 舎 社 神 御 筒 粥 之 行 事																																					
平 成 三 十 一 年 一 月 六 日	ふ	て	ゆ	こ	か	く	な	う	も	く	か	あ	ご	に	ご	ね	だ	あ	は	き	ひ	あ	い	さ	お	わ	ま	小	大	お	な	わ	上 野 国 甘 楽 郡 秋 畑				
				ん		す	め		い		ん	ぼ	い	な		き	る		さ	あ	づ	お	く	せ	あ	む	む	か									
				に		り	り	ず	き	り	び	り	ん	わ	こ	さ	ま	ん	う	ぎ	ん	ば	ば	び	え	は	も	げ	き	き	め	ぎ		ぎ	て	て	せ
	以	上																																			

■平成 31 年 (2019) 正月 御筒粥神事の結果

② 稲舎太々神楽

翌 1 月 8 日は「初八日」といわれ、その一年が開く日として「太々神楽」を舞って祝い、山の神を祀っている。

稲舎太々神楽 (町指定重要無形民俗文化財) は、安政 2 年 (1855) に近隣との土地争いに勝訴したことを祝って、奉納されたのが始まりである。



■稲舎太々神楽

神楽は 25 座で、翁の舞、猿田彦（サルタ）の舞、夫婦の舞の 3 座は必ず舞うこととなっている。現在でも毎年 5 月 3 日の山開きの日には稲含神社神楽殿で、翌 4 日には那須集落内の里宮で演舞奉納されている。

③ 那須の獅子舞

ちいじがき集落の暮らしに溶け込み、人々の心の拠り所となっているのが、鎮守稲含神社の祭礼に五穀豊穰を祈念して奉納される「那須の獅子舞」である。

我が国の獅子舞は、古く欽明天皇のころに端を発し、奈良時代の第 43 代元明天皇の御代には日本各地から 20 人の振付師が都に集まって獅子舞を振り付け、そのなかの一人「田村市郎左衛門教重」が、和銅元年（708）に当地に伝えたのが那須の獅子舞の始まりであるといわれており、稲含大明神御縁起（永正 2 年（1505））にも記述がある。

以来、この那須の獅子舞は、五穀豊穰・天下泰平・国家安全・家運隆昌・無病息災・雨乞いを祈念し、悪魔・伝染病を追い払う守り神として、その徳を称えられながら継承されてきた。



■那須の獅子舞

獅子舞の流派は、県下 18 流派の諸流の祖をなすといわれる「稲荷流下り葉流」であり、伝承者田村市郎左衛門教重の子孫である田村姓の三家（「獅子御三家」）が世襲により獅子の伝承・保存の役割を担っている。舞の形は、18 庭（演技数）あり、このうち 9 庭は子供に関する舞となっている。

ちいじがき集落の子供たちは、満 10 歳から舞を習い始めるしきたりがあり、地区の一大行事である。毎年 10 月第一日曜日の秋祭りで初舞台を踏むために、古式ゆかしい獅子舞が子供たちに手ほどきされている。

この稽古は、代理者（獅子舞の当番）、保存会や子供たちが参加して年間約 150 日行われており、獅子舞とともに稽古される笛の音色も那須獅子舞の獅子御三家である田村邸宅から広く集落に響き渡る。

秋祭りで集落をあげて奉納される獅子舞の一行は、「おねり」と呼ばれている。おねりは、稲含神社に舞を奉納する組と、集落内を巡行する組とに分かれて出発する。

巡行組は、集落と個人とで代々信仰されている与一八幡・若宮八幡・河振の天狗様・稻含神社里宮・天王様・山の神・金毘羅神社・諏訪神社の8つの鎮守様を巡って舞を奉納した後、最後の諏訪神社で稻含神社に奉納した組のおねりと合流して、集落へと戻っていく。



おねりの行列は、耕地や屋敷を支えるちいじがき集落のなかを練り歩き、住民の生活と一体となって脈々と伝承されている。 ■おねりといわれる集落を巡行する獅子舞

(4) まとめ

厳しい自然環境を克服しながら生活を営むため、共存していくことが決して容易ではない地形を活用しながら、ちいじがきという石積を築いたことで、人々はこの地で生活を送ることができるようになり、日々の営みが引き継がれ、現在では、趣のある集落景観を形成する地域となった。

そして、集落の鎮守として祀られる稻含山、稻含神社は、人々の心のよりどころであり、農耕神事・祭礼である御筒粥の神事や五穀豊穰を祈念して奉納される那須太々神、那須の獅子舞などの伝統行事が継承されていることで、町を代表する原風景であるちいじがき集落とが一体をなして、歴史的風致を形成している。

